

「今も生きて働いておられる主」

マルコによる福音書 16章5-8節

森島 牧人 牧師

今日はイースターの出来事の後半の部分を学んで行きたいと思います。聖書には、「婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上り、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。」(マルコ16:8)とあり、これをもってマルコによる福音書は結ばれています。古来この幕切れを不自然だとする見方が多くあるのですが、私は、事実に基づいて主イエスを生き生きと描くことを信条としたマルコが、主の復活を受けて恐れおののく女たちの姿をもまた、ありのままに完璧に記したのだと思っています。

それでは、彼女たちにとって恐ろしかったこととは何だったのでしょうか。大きな石の移動、主の遺体の不在、天使らしき人物の存在などだったのでしょうか。そうではないと私は思うのです。彼女たちが恐れたのは具体的なものではなく、墓の中に満ちている得体の知れない何か、人間ではない何か圧倒的なものの力がそこに働いている気配・・・この出来事全体の尋常でないあり様に、彼女たちは震え上ったのです。この時の「おそろしい」は単なる恐怖ではなく畏怖ということでありましょう。このような身が震え恐ろしいという状況は、イザヤが神と対面するイザヤ書6章にも見ることが出来ます。「わたしは高く天にある御座に主が座しておられるのを見た。衣の裾は神殿いっぱい広がっていた。・・・わたしは言った。『災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。しかも、わたしの目は王なる万軍の主を仰ぎ見た。』・・・」とあり、神の召命に畏れおののくイザヤの姿が見えます。このイザヤや女たちを見る時、復活という出来事に在る「畏ろしさ」を、私たちは知らないということに気付かされます。加えて重要なことは、主の復活は「甦った」のではなく「甦らせられた」のであるということです。主イエスの復活が神の御業であり人間の思いもかけない出来事であったと知る時、私たちは初めて、イースターが神を畏れることから始まるはずのものであったことに思い至るのです。

さらに、墓の中で若者が女たちに言った「かねて言われたとおり・・・」という言葉についても同様に重要な部分です。この「かねて言われた」は「前から言っておられた」という意味だけではなく、主イエスの十字架上の死が私たちの罪によってもたらされたものであり、その死は、神である主イエスの死、つまり神の死であることを意味しています。なぜ神が私たち人間のために死ぬのか。このこと、すなわち主の十字架上の死が私たちの罪と死の問題そのものであるということを理解しなければ、私たちが復活の真の意味を知ることは出来ないからです。神のみ業であるイエス・キリストの出来事こそが、神のみ旨、「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」(ヨハネ11:25)との神の<愛>にほかならないからであります。また、パウロは「キリストの復活は、あなたがたが受け入れ、生活のよりどころとしている福音にほかなりません」(Iコリント15:1)、「もし、死者が復活しないとしたら、『食べたり飲んだりしようではないか。どうせ明日は死ぬ身ではないか』ということになります。」(同15:32)と書いて、復活が今生きている私たちの<命>と直結していることを教え、「死は勝利にのみ込まれた。・・・」(同15:54-55)と記し、復活が罪と死に対する勝利であると教えているのです。

「だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである」とのマルコの結びの記述。ここにマルコが記した女たちや弟子たちの「ただならぬ沈黙」は、主イエスの復活という出来事への彼らの畏れを雄弁に語り、神の御子への確かな<証>ともなっているのです。